

幕末・明治における「好古家」の随筆受容

——武蔵国の在村医小室元長の場合——

古畑 侑亮

はじめに

日本人類学の先駆者・鳥居龍蔵（一八七〇—一九五三）は、明治初年の徳島に生まれたが、十歳前後の少年だったときの書物との出会いを次のように記している。

私一人で小川という本屋へ行つて、その古本を陳べてある所を探していたが、そこで『和漢三才図会』の残本三冊と京伝の『骨董集』上篇下之巻一冊とを、ゆくりなく買い求めた。この二書が、その際大変私の気に入る、何べんとなく繰り返し返し繰り返し読んだ。そしてその二書の全本を手に入れんとして徳島市中

の本屋を探し廻つたが、ついに手に入らなかつた。『骨董集』は実に面白い本と思つた。なお、『和漢三才図会』も面白いよ**い本と思つたが、**後者は漢文で書いてあるからちよつと六ヶ敷かつたが、当時宇田といふ漢学先生の所に通つていたから、その文章はどうやらこうやら読むことができた。この二書は私には最もよい教科書で、また後の私の思想を支配するものとなつたのである。⁹⁾（私の幼年と当時のその世相）『山中翁記念文集』一九二九）

小川（小川知白堂）なる本屋で鳥居が購入したのは、江戸中期の町医者寺島良安（一六五四—？）編の百科事典『和漢三才図会』と、山東京伝（一七六一—一八一六）

の随筆『骨董集』であった。彼は、両書を「面白い本」と思い、「私には最もよい教科書」であったと振り返っている。

また、鳥居の考古学・人類学の師であった坪井正五郎（一八六三—一九二三）は、江戸両国生まれだが、坪井について鳥居は、次のように回想している。

先生は幼時から筆まめで、絵をよくせられ、『新和漢三才図会』や、徳川時代の風俗をいろいろの本から引き抜いて書いておられる。馬琴や京傳や種彦のものが好きで、これらの漫筆・稗史類は先生を大いに支配しているように思われる。²⁾

（「江戸人としての恩師坪井正五郎先生」『武蔵野』一七巻二号、一九三一）

筆まめで、絵が得意だった坪井は、「徳川時代」の風俗を諸書から抜き出して筆写していた。なかでも曲亭馬琴（一七六七—一八四八）や山東京伝、柳亭種彦（一七八三—一八四二）の書いた漫筆（随筆とも呼ばれる。筆にまかせて見聞、体験、感想などを記した著作）や、通俗

的な歴史書である稗史を好んだと、鳥居は回想している。

注目したいのは、ここで取り上げられた書物が、鳥居や坪井の思想を「支配」していたと書かれている点である。この二つの文が、往時を回顧して書かれた文章である点には留意しなければならないが、鳥居の記述がある程度信用できるものだとすれば³⁾、考古学や人類学など新しい学問を切り開いていった彼らの学問や世界観の基盤が、近世に編まれた雑書や随筆（漫筆）、稗史を読み、抜書することによって形成されていた可能性が考えられるのである。

坪井が学友と共に設立した人類学会には、後に博物学者・民俗学者として有名になる南方熊楠（一八六七—一九四一）も所属していた。『南方熊楠全集』の校訂に携わった朝倉照平氏は、熊楠が中学校に入る前後に『和漢三才図会』の抜書を行っていたことが、その後の熊楠の世界把握の基本的な枠組みとなったと示唆する⁴⁾。また、小峯和明氏は、近世の随筆から近代の説話研究への架橋を試みており、その中で熊楠の学問基盤が近世随筆にあることの意義をより深く追求する必要を訴えている⁵⁾。

以上を鑑みると、明治以降に構想され、分化していく

新たな学問体系の基盤となったものを考えていく上で、幕末・明治初期において雑書や随筆、稗史を抜書・筆写することのもった意義を考える必要があるのではないだろうか。

本稿は、それらの中でもとくに研究が立ち後れていると考える随筆からの書抜（抄録）について基礎的研究を試みるものである。⁶⁾

揖斐高氏が「江戸時代後期は「随筆」の時代だった」と表現するように、近世後期には、膨大な量の随筆が編まれた。たとえば、『日本随筆辞典』⁷⁾には、約二四〇〇種の随筆が採録されているが、それも氷山の一角に過ぎない。ここで氏がいう「随筆」とは、西欧のエッセイの訳語としての随筆ではなく、「さまざまな事柄や寓目した書物や記録の中から、関心の赴くままに記事を拾い出して書き留め、気が向けばそれに考証や感想を付け加えたような著作を、総括的に指し示す言葉」である。⁸⁾ 本稿でも、基本的には、揖斐氏の定義に従って随筆の語を使用していく。

鳥居が名前を挙げていた馬琴や京伝、種彦らは、いずれも「考証⁹⁾」という手法をもって事物の起源・沿革を明

らかにすることに強い関心をもっていた。彼らのような人々は、研究史において、しばしば「考証家¹⁰⁾」と総称される。本稿では、とくに江戸期における随筆の作者を指して考証家の語を用いる。

著名な考証家による随筆は、近世後期において、版本あるいは写本の形で多く出回った。それらは、明治以降、活字化され¹¹⁾、アカデミズム・在野の別を問わずに、国文学や国語学、歴史学等様々な分野で研究に用いられてきた。しかし、井上泰至氏が「その記録性・抄出性・考証性ゆえに、レファレンスブックとしては読まれても、正面から論じられることは少ない¹²⁾」と指摘するように、語句や史料を探す際の検索の手がかり、あるいは目的に応じて必要な記事を抜き出すことのできる便利な資料集として使われる場合がほとんどで、随筆という書物そのものが、分析の遡上にあげられることはこれまで多くなかった。

そのような使われ方をされていた随筆であるが、二〇〇〇年前後から出版統制との関わり¹³⁾や、読本・軍書など周辺ジャンルとの関係の中で論じられるようになる¹⁴⁾。さらに、随筆の作者である考証家たちのネットワークにつ

いても分析が広げられてきている⁽¹⁵⁾。人物として取り上げられることが多いのは、山東京伝であり、彼の随筆の構成内容や、そこにみられる考証のあり方等が問われてきている⁽¹⁶⁾。

このように近年、随筆の内容や作者についての研究は徐々に進みつつあるが、随筆という書物がどのように読まれ、利用されたのか、その受容に切り込んだ研究は未だほとんどない。しかし、随筆が個人的な書き物に留まらず、版本や写本として多く出回ったことを考えると、随筆の読者の存在を無視するわけにはいかない。また、その受容面が明らかにできなければ、同時代において随筆がどのような価値をもった書物なのか、位置づけることも難しいだろう。本稿は、読者の観点から随筆という書物の性格の一端を明らかにするものでもある。

鳥居や坪井、そして南方が青少年時代をおくった時代は、鈴木廣之氏が指摘しているように、「古い物の世界」が大きく変貌した時代であった⁽¹⁷⁾。そのような物の価値や世界観が大きく変容する時代に、秩父の山際の村の中で、ひたすら抄録・筆写を続けた人物がいた。比企郡番匠村の蘭方医・小室元長である。元長は、明治十年代の新聞

において「比企郡番匠村の好古家小室元長氏⁽¹⁸⁾」と好古仲間から紹介されている。明治十年代以降、外来の archaeology との接触によって、「古い事物に対する近世以来の関心を引き継ぎ、収集され記録されてきた膨大な蓄積を背負った人々」は、「好古家」と名指されるようになるのである⁽¹⁹⁾。本稿で扱う時期は、明治十年代以前を含むが、元長とその好古仲間については、江戸期の考証家と区別して、「好古家」の称で呼ぶこととする。

小室家は、埼玉県比企郡ときがわ町番匠に今も続く家である。近世において当該地は、番匠村と呼ばれ、比企郡西部の都幾川によつてできた谷の末端に位置する、秩父山地外縁部の低い山間の村々のひとつであった。江戸からの距離は、一六里であり、元禄十一年（一六九八）以降、旗本佐久間氏の知行地となった⁽²⁰⁾。維新後は、武蔵知県事支配から、品川県、韭山県、入間県、熊谷県を経て、明治九年（一八七六）に埼玉県となり、今に至っている。

小室家と番匠村との関係は、享和七年（一七二二）に流行した疾病平癒のために、初代田代元貞が医者として同村に招かれたことに始まるとされる。その後、初代元

貞の孫にあたる三代元長（一七六四—一八五四）の代に、姓を田代から小室に改めた。文政年間には、子の四代元貞（一七八九—一八五八）と共に医学塾「如達堂」を開塾する⁽²¹⁾。

本稿で取り上げる五代元長については、【表1 5代小室元長関係略年表】も併せて参照されたい。元長は、文政五年（一八二二）に四代元貞の次男として誕生した。幼名は求馬。幼少時から医学を祖父や父に学んだ⁽²²⁾。その後、堯民と名乗り、安藤文沢⁽²³⁾（一八〇七—一八七二）のもとに住み込みで医学修行を行う。一方で、忍（現行田市）の四教塾で芳川波山⁽²⁴⁾（一七九四—一八四六）に漢学・漢詩文を学んだ。安政五年（一八五八）、父元貞の死去に伴い、家督を継いだ堯民は元長と名乗り、文久元年（一八六一）まで番匠村の名主後見役を務めた。慶応期には、旗本領主佐久間氏の家族が江戸屋敷から番匠村へ疎開してくるのを世話し、維新後の明治五年（一八七二）には、入間県から医学所出仕に任命され、地域の衛生行政に関わった。明治十年代には、医業を廃して隠居し、多くの古物や古文書を収集する一方で、軍書や地誌の筆写・校正を熱心に行った。なかでも、小田原北条

氏の分限帳の校正を後半生のライフワークとし、『校正小田原北条家分限帳』（小室 2531）を残している。他にも群書類従本に欠けていた中巻を写本で補った旧蔵書の『鎌倉大草紙』が、明治十六年（一八八三）に近藤活版所より『史籍集覧』シリーズの一冊として刊行されている⁽²⁵⁾。両書は、関東の中世史研究における基本文献として今も使用されているものである⁽²⁶⁾。

ちなみに、元長の雅号には、笠山・誠廬・不如学齋・工村（々舎）・南木廼屋「家」などがある。「笠山」は、天保十一年（一八四〇）に師である波山から贈られた号であり、もともとは、波山が山本北山の奚疑塾で先輩の梁川星巖（一七八九—一八五八）からもらった号であった⁽²⁷⁾。「不如学齋」は、『論語』衛靈公篇の「子の曰わく、吾れ嘗て終日食らわず、終夜寝ねず、以て思う。益なし、学ぶに如かざるなり」⁽²⁸⁾からつけられた号であると考えられる。

「小室家文書」は、一九八二年に同家から埼玉県立文書館に寄託、収蔵された文書群である。総点数は、七三三六点。内訳は、近世・近代文書一二八七点、書状一三二九点、典籍三三三七点、書画四五九点、錦絵・刷物四

表1 5代小室元長関係略年表

年号	西暦	年齢	出来事
文政5年	1822	1歳	11月30日、4代小室元貞の次男として生まれる。初名金剛。
文政6年	1823	2歳	正月18日、弟の古宝（のち信平、鼎）誕生。
天保8年	1837	16歳	この頃、芳川波山の四教塾へ入門。
天保9年	1838	17歳	春、四教塾にて、林蔭坡の『栢窓詩話』等を抄録する。漢詩手稿帖『鶏肋草』（～明治4年）をつけ始める。
天保10年	1839	18歳	11月6日、小川村の天沢さとを娶る。
天保11年	1840	19歳	12月、旗本領主佐久間氏の江戸屋敷類焼。御用金200両を課せられる。
天保12年	1841	20歳	8月4日、長女さの誕生。
天保14年	1843	22歳	芳川波山の『学務知要』の校訂を引き受ける。 芳川波山、富津の忍藩陣屋へ房総水路警備を命じられ赴く。 5月27日～28日、元長ら新宮涼庭訳『人体分離則』巻1・2を筆写。
嘉永2年	1849	28歳	弟の鼎、八王子千人同心師岡氏を継ぐ。鼎、寺の過去帳から八王子城戦没者の名を筆写し、元長に贈る。
嘉永5年	1852	31歳	伊勢参りを兼ね、奈良・大坂・京都へ旅行。漢詩文集『西遊詩草』と紀行『遊勢紀勝』を著す。
安政5年	1858	37歳	父元貞の死去に伴い、家督を継ぐ。元長と称す。7月末、江戸でコレラ流行。
安政6年	1859	38歳	2月、比企郡にて種痘を実施する（～7月）
文久元年	1861	40歳	3月、番匠村名主後見役を退役。
文久3年	1863	42歳	5月13日、『前歴録』を筆写。5月28日、『咬葉秘記』を筆写（共に安藤文沢の蔵本で、大塩の乱の実録）。
元治元年	1864	43歳	『水浪異聞』（天狗党の乱の実録）を筆写。
慶応2年	1866	45歳	『征長紀事』（長州征伐の実録）を筆写。
慶応4年			『中外新聞』他多くの新聞を筆写。3月、旗本領主佐久間宇右衛門の家族が江戸屋敷から番匠村まで疎開するのを手伝い、身の回りの世話をする。
明治元年	1868	47歳	10月9日、宮川政運の『宮川舎漫筆』を抄録する。
明治3年	1870	49歳	11月14日、入間県成立。
明治4年	1871	50歳	入間県より医学所出仕に任命される。3月、息子の恭平等により種痘開始（～4月）
明治5年	1872	51歳	持病のリウマチが悪化。
明治6年	1873	52歳	
明治7年	1874	53歳	日本橋馬喰に牛痘種痘所、各地に牛痘種痘所が設置される。衛生局設置。4月、医師の開業試験実施。熱海へ湯治を兼ね旅行（『熱海遊簿』）。『工村々舎詩集』2編を編む。『八王子殉難録』に加筆・添削。備忘録『明治七年見聞雑記』。
明治8年	1875	54歳	熱海へ湯治を兼ね旅行（『熱海再遊簿』）。箱根湯本の旅館主人福住正克を介し早雲寺の『北条分限帳』を筆写。
明治9年	1876	55歳	熱海へ湯治を兼ね旅行（『三遊豆記』）。
明治10年	1877	56歳	『工村々舎詩集』3編を編む。
明治11年	1878	57歳	『南木通家随筆』初編・2編を著す（明治18年の11編まで継続）。小シーボルト、黒岩横六郎を見学。6月「重忠断碑」修復事業起工。
明治12年	1879	58歳	3月、畠山如心斎、比企郡・男衆郡を訪れる。5月、如心斎、先祖祭として重忠周忌を実施。12月、「重忠断碑」保存施設完成。恭平、番匠村村会議員に当選。10月頃、芳川恭助を通じ、県庁史所蔵本『新編武蔵国風土記稿』の筆写を開始。『鉢型北条分限帳』を筆写。備忘録『明十二雑録』。
明治13年	1880	59歳	新井白石の『古史通感問』を国に献本。近藤瓶城へ架蔵の『鎌倉大草紙』を提供（のちに国へ献本）。『新編武蔵国風土記稿』の筆写を中断。
明治14年	1881	60歳	『小田原衆所領役帳』・『成田家分限帳』を筆写。『校正小田原北条家分限帳』校正一旦完了。12月、元長、峯岸重行と共に『慈光寺実録後編』を編集。
明治15年	1882	61歳	内山作信の息子温載、慈光寺へ参詣、法華経等を調査。
明治16年	1883	62歳	4月、近藤瓶城『校本鎌倉大草紙』を出版。6月27日、畠山如心斎没。
明治17年	1884	63歳	『正気詩文』初編と『紀行随録』初編～3編を編む。 根岸武香・近藤瓶城により『新編武蔵国風土記稿』刊行。10月31日～秩父事件。
明治18年	1885	64歳	『正気詩文』2～5編を編む。6月30日、福住正克から高野山高室院所蔵の『小田原衆所領役帳』の写しが送られてくる。河田家の養子に出ていた三男の孝三に謄写させる。12月10日没。

（註1）『小室家文書目録』（埼玉県立文書館、1997）、細野健太郎「近世後期の地域医療と蘭学—在村医小室家の医業を中心に—」（『埼玉地方史』43、2000）等を参考に筆者作成。

（註2）著作については、筆写・作成年代がわかるものに限定して載せた。

表2 5代小室元長著作一覧			
文書番号	成立年	西暦	書名
俳諧			
2713	明治		正統俳家奇人談・随得録
2705-1	明治16年	1883	会日稿
2709	弘化・嘉永以降		俳諧連歌集
漢詩文			
3389	天保9年～明治4年	1838～1871	鶏肋草
108/275/2663	明治7年/明治10年/明治18年	1874/1877/1885	工村々舎詩集 二編～〔四編〕
2656/2657	嘉永5年	1852	西遊詩草①②
31	明治12年	1879	詩文底冊
58	[明治16年]	1883	詩文底冊 全
1259-1	乙酉		枕上放吟
2658～2662	[明治17年/明治18年]	1884/1885	正気詩文①～⑤
2664～2666			正気詩選 初編～三編
編纂物			
2974～2976			不如学齋叢書①～③
2980～2982			叢書①～③
2983～2990			工村々舎叢書①～⑧
2963～2973	明治11年～明治18年	1878-1885	南木迺家隨筆 初編～十一編
107	明治7年	1874	明治七年見聞雜記
3388	[明治12年]	1879	明十二雜録
2979			無用々録①②
3971-2			備忘録
3327			寤天録①～⑩
2943～2962			紀行隨録 一～三
2596～2598	明治17年	1884	
分限帳			
2531	明治18年	1875	校正小田原北条家分限帳
地誌			
2884			相模国村名便覧
2887			三府五港近県宿駅
2891			上野国村名一覽
紀行			
2633	嘉永5年	1852	遊勢紀勝
271-1	明治7年	1874	熱海遊簿
271-2	明治8年	1875	熱海再遊簿
271-3	明治9年	1876	三遊豆記
医学			
3861			診餘雜話 初編

(註1)『小室家文書目録』(埼玉県立文書館、1997)等を参考に筆者作成。

(註2)巻数が表示されていない著作については、筆者が便宜上丸番号を付した。

二五点。近世・近代文書に比して、書状と典籍が多いのが特徴である。

小室家文書は、主に蘭学史の方面から紹介されてきた。近年では幕末期における小室家の経営の実態が分析され、幕末から明治初期にかけての医療技術の伝播・近代化の状況の事例として取り上げられている⁽³⁰⁾。

一方で、「五代小室元長が「好古家」達と取り交わした書簡や史料がよく整理されて残って」いることから、「好古家のアーカイブズ」としても注目され、明治初期

に活躍した元長周辺の「好古家」たちのネットワークの実態が分析され始めている⁽³¹⁾。

五代元長は、収集した史料や情報を多くの編纂物としてまとめている〔表2 5代小室元長著作一覧〕を参照のこと。編纂物の語については、当面、工藤航平氏の「村の編纂物」の定義⁽³²⁾に従うが、本稿では、書物からの抜書を再編輯したものに限定して取り上げるものとする。

先行研究では、元長の編んだ編纂物のうち『工村々舎叢書』(小室 2983—2990)が取り上げられ、同書に収

録された中世史料の紹介・分析⁽³³⁾や、それらと元長が好古仲間ととりかわした書簡に現れる史料名との対応関係の解明⁽³⁴⁾などが行われてきている。

『不如学齋叢書』と『叢書』については、『小室家文書目録』の解題に「雑抄では、元長笠山の「不如学齋叢書」・「工村々舎叢書」など一五冊が注目される。所載分野は多岐にわたっており、「不如学齋叢書」という書名からは想像もできない内容が含まれている」と紹介されるのみである。これまで先行研究においても取り上げられたことがなく、どのような史料であるのかも不明であった。

しかし実は、両叢書は、幕末から明治初期にかけての三〇年余りにわたる書物からの抄録をまとめた編纂物であり、詳細は本論にて分析するが、その大部分は、随筆からの抄録によって構成されていることから、元長の随筆受容の一端に迫ることができる史料であると考えられる。

以上を踏まえ、本稿では、『不如学齋叢書』と『叢書』について基礎的研究を行うとともに、そこにみられる抄録のされ方に注目する。さらに、元長の他の著作や、明治十年代の新聞等を併用することで、抄録された随筆の知識・情報がその後どのように使われたのかを明らかに

する。それによって、幕末から明治初期を生きた「好古家」における随筆を抜書することがもつた意味について考察することが本稿の課題である。

以下、本文および表において、「〔 〕」内は割注、「〔 〕」内は筆者による補足、傍線は筆者による強調を示す。本文中では、混同を避けるため、表中の項目番号および図表名を「〔 〕」で括った。引用史料は、固有名詞を除いて旧字体を新字体に改め、書物名については、便宜上太字で示した。また、書物中の項目については、該当箇所を「巻数・項目数」の形で、アラビア数字にて示した。なお、本論中に登場する随筆の作者については、後掲の【表5 『不如学齋叢書』『叢書』主要引用随筆一覧】に人物説明を載せているため、本文中では生没年等を省略している。

一 『不如学齋叢書』『叢書』の基礎的研究

『不如学齋叢書』（小室 2980 — 2982）と『叢書』（小室 2974 — 2976）は、どちらも全三冊。以下、本稿では、文書番号の順に従って便宜的に①②③とそれぞれに番号

を振る。

両叢書の大きさは、『不如学齋叢書』の三冊と、『叢書』①②が半紙本、『叢書』③のみが大本サイズとなっている。いづれもかなりの厚みがあり、小口をきれいに化粧裁した上で表紙が付けられている。『不如学齋叢書』①③と『叢書』①③は縹色雲文様空押し表紙、『不如学齋叢書』②は香色無地表紙、『叢書』②は茶色雲文様空押し表紙である。

『不如学齋叢書』①の表紙を開くと、項目名のみを列挙した目録が現れる。筆者は、両叢書の目録をもとに、【表3】『不如学齋叢書』『叢書』項目一覧】を作成し、巻ごとに項目番号を振った。以下、適宜参照願いたい。

目録の次の丁から本文が始まるが、わかりやすい例として、四番目の項目を挙げる。

【史料1】『不如学齋叢書』【4】「二節切尺八」

文祿慶長ノ頃盛ニ行ハレシ一節切尺八ト云モノアリ、今ハ吹モノ稀ナリ、按スルニ羅山文集（卷十九元和九年作）唐太宗貞観年中有起居郎呂才者善知音律（中略）俱吹尺八（下略）

同書「羅山文集」余音尺八記云（中略）按二一路老人

ノ名ハ僧横川京華集二見工、

依一路老人詩

白髪高僧束得々（中略）此詩狂雲集二見へズ」

糸竹初心集ニ云、一先一節切尺八ハ其濫觴マチ／＼ニ

シテサダカナラズ、（中略）トアリ

和漢三才図会ニ云、

（図略）

按一簡切、似尺八而短、其長一尺八分、：

黒川道祐雍州府志土産門云、笛尺八

所々造之、其内宜竹所作為妙（中略）永祿年中ノ古文書

洞簫曲ニ載流所ト同シ尺八十二調子ノ次第

一越 ● ● ● ● ● ○ ○

断金 ● ● ● ● ● ○ ○

平調 ● ● ● ● ● ○ ○

（図中略）

上無 ○ ● ● ● ● ○ ○ ○

永祿九年閏八月 日

「二節切尺八」とは、室町から江戸時代にかけて流行した笛の一種である。ここでは、『羅山文集』に始まり、『京華集』、

『叢書』① (小室2980)	23.1×16.4×1.9
1静女歌/2慈光山奥列征伐御祈禱願狀/3真実除髮/4畠山父子討死/5近松略伝/6南郭徂徠聯句/7金城刺客諸家変名/8十八般武芸/9廿八般武芸/10神仙策/11短冊/12道灌歌/13氷川神社/14名山論/15盲曆 盲心経/16壺石碑/17諸国度数/18帯木/19松嶋/20江戸町数并人別/21永代橋溺死/22松平甚太郎君世系/23江戸蘭医品題歌/24トツトリトン 井厄弘/25家齊公太政官宣文/26岡村古書軍器/27徳川満徳寺呼状并請書/28水戸侯詩歌/29安芸十勝/30半可山人狂詩/31棋字/32三忠臣贊/33一太郎伝小竹跋/34柳川/35白川侯面贊/36金鶏医談抄四条/37雨森宗信松陰医談四条/38憫農詩/39兵士/40通士/41以女聚狗/42狂句/43和歌四天王/44横綱免状/45磯多取扱/46牙/47本朝平安城諸件/48辛丑紀事/49管北野/50源順/51丹波康頼雅忠/52天平瘟疫/53青樓歌仙/54貞門七仙/55俳諧五派/56千種三位黒澤翁満問答/57界浦風/58医家系譜/59飯田玄泉文/60襄上薬名題字/61 [戊戌] 夢物語/62日晷表/63狭山茶場碑/64三神託言/65蕃山行状/66新田公矢口碑/67四十六士論太宰純/68赤松四十六士論詳/69狂歌/70聯句/71狂詩/72洋和聯句/73八百屋於七/74名歌/75純子上下/76浅草古仮面/77時宗制議/78淨瑠璃節付起源/79三味線/80琉球小歌/81小堀遠州尺牘/82碑/83為朝公書/84宋国子監図/85忍/	
『叢書』② (小室2981)	23.7×16.5×2.8
1西山遺事/2仁論/3鹿角図譜/4品物具鉢統名抄/5東門隨筆/6本佐録/	
『叢書』③ (小室2982)	26.9×19.2×2.1
1大猷院様御書/2白川老侯花月草紙/3白石氏奉命教諭朝鮮使客觀案筆談/4同聖像考/5同決獄考/6同案考/7同木瓜考/8同郡国名字考/9同河川通用考/10同手簡 (朱筆) 「新室手簡并典内通歌書」/11安政五年黄金写真/12設楽氏略系/13林氏除邑録/14同武家執政略/	
(註1) 項目名は、基本的に各巻の目録よりとり、巻ごとに通し番号を振った。 (註2) 巻ごとに寸法を計測し、縦×横×高さ (cm) で大きさを示した。 (註3) 埼玉県立文書館所蔵『不如学齋叢書』①②③『叢書』①②③より筆者作成。	

『糸竹初心集』、…と多くの書物が引用され、さらには「永禄年中ノ古文書」までをも載せて、その起源・沿革がたどられている。このことから、『不如学齋叢書』は、元長が諸書の記述を抄録し、それらに考証を加えながら著述した考証隨筆であるようにみえる。

ところが、「二節切尺八」の項を最後まで見てみると、末尾に「以上五十二条南畝莠言二就テ鈔ス」と記されていた。

『南畝莠言』は、幕臣大田南畝の隨筆である。同書を繙いてみると、巻下に、「廿三一節切尺八の考くさく并図」の項があり、文章を対照してみると、原文から数条分省略されている箇所があるものの、引用されている文章については、ほぼ原文と一致した。E)の前の【E】【G】についても、「十五東坡三度赤壁に遊ぶ」、「廿九 滕文公の領分并漢の世物価の考」、「十八 史記抄にある史記家漢書家師行、末師行の事」と、『南畝莠言』の中にそれぞれ対応する項目を見つけた。

さらに、『不如学齋叢書』③では、中盤の【17】「苦学」文末に、「以上、世事百談ニ於テ抄ス」と記されていた。『世事百談』は、江戸の雑学者として有名な山崎美成の隨筆である。同書にあたって記述を対照させてみると、【128】から【177】

までのほとんどすべての記事が『世事百談』からの引用であることが判明した。

このように元長による出典の記述を手がかりとし、典拠が不明の項目については、複数の随筆辞典や索引^⑤を併用することで、両叢書の典拠をできる限り明らかにする作業を行った。その結果明らかになったところを〔表4 』『不如学齋叢書』

『叢書』典拠一覧』にまとめた。

ところで、『不如学齋叢書』③の中ほどには、冒頭の目録とは別の目録が綴じられている。目録の丁の裏には、三人の賢人が水甕を囲んでなにやら話している図が描かれている。

これは、『南畝莠言』の「二」「酢吸の三聖并図」に描かれた図の模写である。次の丁からは、〔128〕「西方聖人」の本文が始まっているが、その丁の冒頭には、「誠廬茶話 笠山道人 鈔」と内題が書かれている〔図〕。

その綴じ目（ノド）の部分をよく見ると、綴じ穴の痕が確認された。使用されている料紙もそれまでの白紙から、版芯に「如達堂」と刷られた黒色野紙に変化しており、〔128〕以降がもともと独立した冊だったことが推察される。ちなみに『不如学齋叢書』①〔29〕「元日ハゼ蒔」の前にも「誠廬茶話五編 笠山処士抄録」の内題が見え、前の丁に目録が

【図】

『不如学齋叢書』③より「誠廬茶話」（小室2976）
埼玉県立文書館所蔵。筆者撮影。

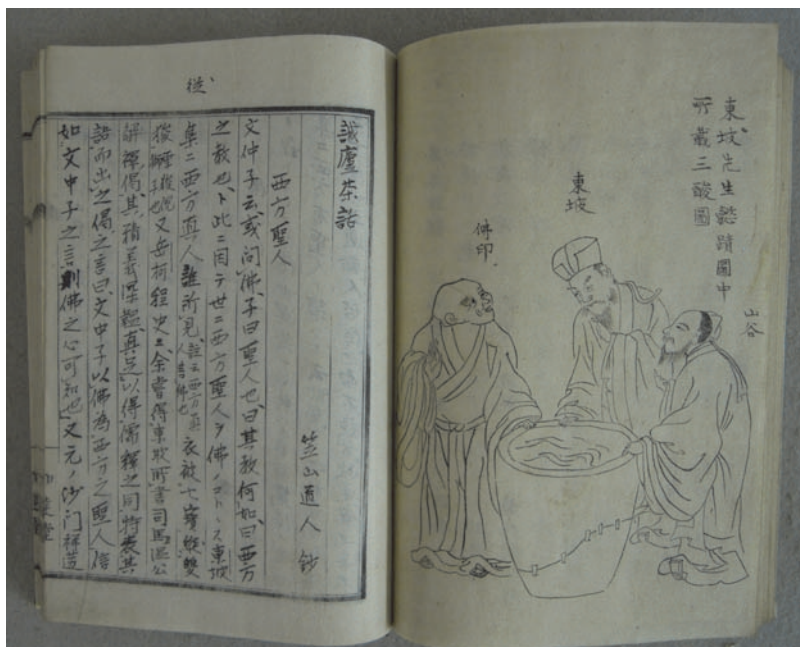


表4『不知学斎叢書』『叢書』出典一覧		
番号	典拠	備考・書名
『不知学斎叢書』①(小室2974)		
改装題	「不知学斎叢書」	縹色花文縁空押し表紙
原装題	なし	
目録	「目次」	「印」「小室元長蔵書」
1~4	「南畝考言」	
5・6		
7	「三養雜記」	
8~13	「晤語」	
14~16	「梅園日記」	
17~27		
28	「東京日々新聞」	「明治十二年十月廿九日東京日々新聞二千三百六十八号掲載」
目録	「目録」	
内題	「藏蘆茶話五編 空山処士抄録」	
29~62	「三養雜記」	
63~98	「梅園日記」	
99~126		

『不知学斎叢書』②(小室2976)		
改装題	「不知学斎叢書」	春色無地表紙
原装題	「不知学斎叢書」	
目録	「叢書目録-不知学斎主人輯」(蔵書印なし)	
1	「芳川波山の墓表」	黒色罫紙10行/版心「舎魚草堂蔵」
2	小揚理兵衛伝/小揚理兵衛伝/孝子新井孝蔵伝/孝子犬塚常方伝	
3~7		
8		(朱筆)「良軒安井翁校点」
9		黒色罫紙11行/シマあり
10~14		
15	「時物正誤」	黒色罫紙9行/朱筆「此書青山村青木壮栄翁所蔵。蓋其亡息周三氏所書云」
16~20	「精意詩話」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
21~33		黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
34・35	「白石畑外国通信事略附録」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
36		黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
37~43	「白石神書」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
44	「信長譜」/「豊臣将軍家譜」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
45		黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
46・47	「占春説」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
48~50	「孝経楼漫筆」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
51~67	「游庵隨筆」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
68~73		黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
74~76	「東鑑要目集成」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
77	「画図大略」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
78	「梅園日記」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
79~83		黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
84	「三養雜記」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
85	「梅園日記」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
86~91		黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
92	「孝経楼漫筆」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
93~99		黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
100~176	「孝経楼漫筆」	黒色罫紙11行/版心「如達堂蔵」
178~181	「撰醒紀談」	黒色罫紙12行/版心「如達堂蔵」
182・183	「孝経楼漫筆」	黒色罫紙13行/版心「如達堂蔵」
184・185	「撰醒紀談」	黒色罫紙14行/版心「如達堂蔵」
186		黒色罫紙15行/版心「如達堂蔵」
187・188	「孝経楼漫筆」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
189~191	「撰醒紀談」	
192・193	「玉石雜詠」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」

194~207	「宮川舎漫筆」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
208~241		黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
242~255	「職源抄」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
256~263	「撰醒紀談」	
264・265		
266	「難波江」	
267		(朱筆)「小泉今大里郡二隅ス、片楊ハ大久保村ノ旧跡」

『不知学斎叢書』③(小室2976)		
改装題	「不知学斎叢書」	縹色花文縁空押し表紙
原装題	「不知学斎撰抄総目録 農工商短産比較」	
目録	「目次」	「印」「小室元長蔵書」
内題	「不知学斎撰筆初編・二編」	
1~11	「柳庵雜筆」	
12~48	「漫画隨筆」	
49~52	「玉石雜詠」	
53~76	「理斎隨筆」	
77~80	「南畝考言」	
81~88	「翁草」	
89~92		
93	「回答の写し」	朱色罫紙8行/「交詢社書簡箋」
94~99	「閑意瑣談」	
100~103		
104	「南畝考言」	
105~110		
111~119	「東籬子」	
120・121		
122	「閑意瑣談」	
123~126		
目録	「目録」	
127	「南畝考言」	「図のみ」
内題	「藏蘆茶話 空山遺人 鈔」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
128~177	「世事百談」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
178~181	「漫画隨筆」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
182~186		黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
187~231	「南畝考言」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
232		黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」

『叢書』④(小室2980)		
改装題	「叢書」	縹色花文縁空押し表紙
原装題	なし	
目録	「備忘録目次」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
内題	「不知学斎備忘録」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
1~4	「東鑑」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
5~13		黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
14~19	「東遊記後篇」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
20~26		黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
27	「秩父会館御留」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
28~35		黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
36	「金鶴医談」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
37~49		黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
50~52	「梅園日記」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
53	「青楼歌仙」	(朱筆)「田末茶話」/黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
54~58		黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
59		黒色罫紙9行
60	「義上乗名題字」	「印」「小室元長蔵書」
61	「「戊戌」夢物語」	
62	「日暮表」	「印」
63	「狭山茶湯碑」	(版本)
64	「三神託言」	(版本)
65	「藩山行状」	(版本)
66	「新田公次口碑」	(版本)
67	「赤穂四十六士論」	(版本)
68	「赤松四十六士論評」	(版本)
69~72		黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
73~76	「世事百談」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
77・78		黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
79・80	「世事百談」	黒色罫紙10行/版心「如達堂蔵」
81		古色
82	「本草啓蒙」	
83~85		

(註) 埼玉県立文書館所蔵『不知学斎叢書』①②③と『叢書』④、日本陸軍大蔵編輯部編『日本陸軍大成 新装版』、国文学研究資料館所蔵和古書・マイクロ/デジタル目録データベース等より筆者作成。

付されている。

以上の証拠から、『不如学齋叢書』①③には、明らかに改装が加えられていると考えられる。

また、『不如学齋叢書』③の表紙を見通してみると、丈夫な厚紙で作られた改装表紙の下に、本文と同じ料紙を使用した原装の表紙が確認できた。その左肩には打ちつけで「不如学齋雑抄総目録 農工商恒産比較」と墨書される。さらに、同書の内題には、「不如学齋襟筆初編・二編〔合冊〕」と書かれている。

これら原装の名残から、『不如学齋叢書』①は、元長がそれ以前に作成していた抄録集『誠廬茶話』五編を他の編と共に再編輯することで行われ、『不如学齋叢書』③は、抄録集『不如学齋襟筆』初編・二編を合冊した『不如学齋襟抄』に、『誠廬茶話』初編を綴じ合わせることで作成された³⁶と推測される。

続いて、残った『不如学齋叢書』②に目を向けると、改装表紙の下の原装表紙には「不如学齋叢書」と墨書されている。本文冒頭の【二】には、元長の師である芳川波山の墓表の写し（嘉永紀元秋八月 東奥安積信撰）が綴じ込まれている。【二】に使われている表紙の版心には「舎魚草堂蔵」

とある。「舎魚」とは師である芳川波山の号であり、波山が塾で用いていた罫紙を使用していることがわかる。

さらに、【20】「倒載」の文末には、「以上五条、天保戊戌春日四教塾客中梧窓詩話而抄録」との記述を見つけた。四教塾とは、波山の私塾のことであり、【11】から【20】までは、元長が四教塾で漢学を学んでいた天保九年（一八三八）に、林蓀坡^{せんぱ}の漢詩文集『梧窓詩話』から抄録したものであることがわかる。

くだって、【20】「辻君ノ歌」には、「右「大石瀬左衛門書状」以下宮川舎（宮川政運。志賀理齋次子）漫筆に就て抄録す〔明治庚午閏十月九日〕」との記述がみられる。ここから、【24】「右大石瀬左衛門書状」から【20】「辻君ノ歌」までは、宮川政運の随筆『宮川舎漫筆』からの抄録であり、当該箇所は、明治三年（一八七〇）に筆写されたことがわかる。さらに、【25】「浄蓮寺鐘銘」には、「明治五年壬申四月実見」との記述がみられ、寺の鐘銘が筆写されている。

以上から、『不如学齋叢書』②は、おおよそ天保期から明治ゼロ年代半ばにかけて作成された抄録を綴じ合わせ、最後に『誠廬茶話』の一部をつなげることで、『不如学齋叢書』として編まれたものと考えられる。

このように両叢書は、元長自身が抄録集を再編輯することで作られた編纂物であり、必ずしも抄録した当時の形と同じであるとは言えない。しかし、編纂の手が加えられることで、元長が重要だと考えたものが残され、綴じ込まれていると考えられる。そこには、誰のどのような書物からの抄録が多く見られるのだろうか。

筆者は、表4から引用回数が多い著作を抽出し、【表5】『不如学斎叢書』『叢書』主要引用書一覽』を作成した。同表に書名の挙がった書は、『東鑑』と『東鑑要目集成』、『職原抄』を除いて、すべて随筆である（『梧窓詩話』も、随筆的な性格が強い漢詩文集である）。当時すでに刊行されていた有名なものがほとんどで、翻刻の有無を確認すると、いずれも『日本随筆大成』等に翻刻されているものであることがわかった。

続いて、引用の総数を比較すると、山崎美成の著作からの引用が最も多い。しかし、個別の著作ごとにとみると山本北山『孝経楼漫筆』からの引用が最も多くなる。

表4に戻ると、『不如学斎叢書』②【100】「若水」から【76】「日本後記」までは、すべて『孝経楼漫筆』からの引用である。その中では、古代の服制【118】「服制」から【125】「上

下」まで）や、季節ごとの行事の由来【100】「若水」から【102】「嘉定」、【174】「式三番叟」、【175】「催馬楽」といった有職故実に関する項目の抄録が目立つ。

さらに、『不如学斎叢書』②【33】「南畝哭北山并絶命詩歌」では、大田南畝が北山の死を悼んで詠んだ詩と歌を引用している。

【史料2】『不如学斎叢書』②【23】「南畝哭北山并絶命詩歌」欄外

本念寺表門ヲ入り、直二右ノ側ニ口寄アリ、其中ニ山本氏代々ノ墳墓アリ

述古山本先生并妃合川氏合葬墓

碑文亀田鵬斎書大窪天民、南畝ノ墓ハ本堂ノ後ニアリ、寺中最第一ノ巨石也

【23】の欄外には、北山の墳墓の所在が記され、その墓の略図が描かれる。同【33】「般若」でも、朝川善庵の『善庵随筆』から北山が語った話を書き抜くなど、『不如学斎叢書』②の中盤は、主に北山に関する抄録を中心に構成されているといえる。

表5 『不知学書目録』【『養子』主要引用図書一覧】

山崎美成 (1796—1856)	江戸後期の雑学者。名は美成、字は久輔、通称新左衛門のち久作。号は好閑堂、北庵、小山田与清、北蔵庵等の号。人、江戸下谷長者町の薬師通。家業を継ぐが、天保中、薬師通を人に譲りて、金杉村に居席した。私塾や英蘭会の会員として、屋代私塾、曲亭馬琴等と親交を交わす。康永編島内蔵頭直季に儒臣として仕交るも、病を得て退いた。晩年は禁慾した。	107	55	『世事百談』	考証。4巻、天保11年(1840)成立。同年江戸青雲堂より刊行。様々な考証記事を取めるが、とくに音曲・芸能に詳しい。
山本北山 (1752—1812)	江戸時代中期の儒者。『孝経』を信奉し、24歳で『孝経集覽』を著す。『作文志親』『作詩志親』で古文辞学を批判し、弟子に深川屋敷、太田錦庵を内連し、江戸出身、名は信有。字は天龍、通称は喜六。別号に孝経塾主人、桑陰塾主人など。	82	82	『孝経後漢書』	考証。刊本、4巻4冊、嘉永3年(1850)3月、江戸須原屋伊人刊。大木、項目数274条。和漢古今の多方面にわたる雑学。考証であるが、その多くは、自らの考証ではなく、『五豹かつま』『安斎隨筆』『隣女唱』等同時代の随筆の抄録が多い。
大田南畝 (1749—1823)	江戸時代中期の狂歌師、戯作者、幕臣。松崎親徳らに儒学、和学を学ぶ。酒肴、黄表紙を多く書き、「万歳狂歌集」などで狂歌界の中心となる。奥政の改政後は和絶句と絶句、文政期近役などの公務と借字(抄出・考証)に勤んだ。名は寛、字は子箱、通称は直次郎、別号に彌山人、四方赤良など。	52	52	『梅園日記』	考証。刊本、5巻5冊、弘化2年(一八四五)7月、江戸、北林堂西宮弥兵衛、萬安堂英大助刊。大木、173条。絵入、風俗・俳諧や古書中の語句に関して考証した書。
北静庵 (1765—1848)	江戸時代後期の国学者、狂歌師。生家は江戸新橋の別業金春屋。屋敷書肆の北佐をつぐ。元木綱に狂歌を、山岡夢明に国学を学び、博識で知られた。本姓は鈴木、名は直言、字は有和、通称は三左衛門、別号に梅園、四当書屋、兩夜損折翁。	42	42	『漫園隨筆』	2巻、明和4年(1767)成立、刊行、2巻を通じて124条。
新米運洲 (1715—1776)	江戸時代中期の儒者。篠崎東庵に師事。祖孫字に頼朝とい、博学で世に知られた。江戸出身。名は吉明、嘉章、字は子煥、煥朝、通称は嘉藏。	40	40	『善能隨筆』	北島鶴房以下、藤原為子に至る24人の小伝、10冊。天保14年閏月23日栗原孫之丞信充藏版。江戸尚友堂より刊行。画像筆跡等の模写の他、多くの絵説を添える。
志賀理斎 (1762—1840)	江戸時代後期の儒者。柳川重信(2代)の父。江戸の人、幕府でつかえる伊賀者の家に生まれる。儒学、和学に通じ、文政の頃江戶城奥語となり、のち金奉行となる。名は忍、字は子種、通称は理助。別号に天鶴山人、	24	10	『善能隨筆』	北島鶴房以下、藤原為子に至る24人の小伝、10冊。天保14年閏月23日栗原孫之丞信充藏版。江戸尚友堂より刊行。画像筆跡等の模写の他、多くの絵説を添える。
栗原信充 (1794—1870)	江戸時代後期の有職家。學野栗山に儒学を、平田篤胤に国学を、屋代私塾に有職家業を学ぶ。弘賢の「古金要書」の編纂に関わった。「武器神髓」「刀劍図考」など武家故実に関する著作も多い。江戸出身。字は由臣、通称は孫之丞。号は柳庵。	16	16	『善能隨筆』	考証。刊本、大木、2巻1冊、嘉永2年(1849)の跋、嘉永3年(1850)7月刊。発行は、江戸和泉屋金右衛門他8書林。
朝川善庵 (1781—1849)	江戸後期の儒学者。名は鼎、字は五鼎、善庵は号。片山兼山の子、医師朝川家孫の母、山本北山の門人で、江戸で私塾を営む。幼くして父を失い、母が再婚したにまつて、博学で私塾を好むことをもって全国に名を知られ、江戸で佐藤一斎と並ぶ名声を得た。	16	16	『善能隨筆』	考証。刊本、大木、2巻1冊、嘉永2年(1849)の跋、嘉永3年(1850)7月刊。発行は、江戸和泉屋金右衛門他8書林。

最後に、『叢書』三冊の内容をみる。『叢書』①には、『東鑑』や『東遊記』、あるいは『世事百談』等からの抄録がみられ、『不如学齋叢書』と類似した性格の編纂物であると考えられる。ただし、その後半部分には、少し異なった特徴がみられる。例えば、『22』「松平甚太郎君世系」には「芳川波山茶話」、【30】「半可山人狂詩」には、「千鳥庵田禾の話」などと書かれ、伝聞による情報を含んでいることがわかる。また、『27』「徳川満徳寺呼状并請書」には、「秩父奈倉御用留より抄す」と墨筆され、御用留を筆写していることが注目される⁽³⁷⁾。

さらに同書の後半には、『65』「蕃山行状」、【66】「新田公矢口碑」、【68】「赤松四十六士論評」と版本が続けて綴じ込まれている点が特徴的である。

これに対して、『叢書』②③は、抄録ではなく、写本の合冊となっている。『叢書』②【3】「仁論」には、「如達艸堂」の蔵書印が捺され、最終丁に「門人 武蔵 小室誠校」の奥付がみられる。先行研究では、如達堂において（元長を含めた）門人による写本の作成が行われていたことが指摘されており⁽³⁸⁾、そのようにして筆写された写本の一部ではないかと考えられる。「如達艸堂」の印は、『叢

書』②【6】「本佐録」にもみられる。元長の祖父は、安政元年（一八五四）に亡くなっていることから、【2】と【6】は、少なくとも安政元年以前に筆写されたものであると考えられる。『叢書』③は、新井白石の著作と書簡の写がほとんどを占めており、「白石著作集」の体を為している⁽³⁹⁾。

以上から、『不如学齋叢書』①②③と『叢書』①は、それ以前に作成していた複数の抄録集を再編輯して作られた編纂物、『叢書』②③は、写本を合冊した編纂物である、とまとめられるだろう。

二 『不如学齋叢書』における抄録

前節での分析により、『不如学齋叢書』①②③と『叢書』①は、随筆の抄録によつて構成される編纂物であることが明らかとなった。それでは、元長は、随筆をどのように読んでいたのだろうか。本節では、『不如学齋叢書』における抄録のされ方に注目することで、元長における随筆の読みに迫りたい。

以下、『不如学齋叢書』③を中心として、抄録と原本との

対照を行つていく。

【史料3】

a 『不如学齋叢書』③【E】「華甲重逢」⁽⁴⁾
六十一歳ヲ本卦ガヘリトテ生年ノ干支ニ当ルヲ以テ生誕
ノ日ヲ祝フコト世ノ習シナリ、明ノ陳白抄集ニ詩アリ、
華甲重逢ト云ルヨシナリ」又七十七歳ヲ喜賀、八十八歳
ヲ米年と云リ、(中略)「八十歳ヲ米年トスルコト抛ナシ
トスベカラズ」○安永五年世上高寿ノ者(後略)

b 『世事百談』121「華甲重逢」

六十一歳を本卦がへりとして、生年の干支にあたるをもて
生誕の日をいふこと世のならはしなり。華甲重逢とい
へるよし、明の陳白抄集に詩あり。また七十七歳を喜賀、

八十八歳を米年と云り。(中略) 八十歳ヲ米年トスルコ
ト抛ナシトスベカラズ、さて高年長寿の人は、古へより
尊敬することにて、恩賜のあつかりしためし、国史にも
見えたり。近々江村專齋などのなほしは「近世」畸人伝
にもしるして人のしるところなり、安永五年世上高寿ノ
者(後略)

文の前後が一部あるものの、前半はほとんど同じである。
しかし、bで下線を引いた箇所は、aでは省略されている。
省略されたのは、長寿の人は昔から尊敬され、恩賜にあずか
ることが日本の歴史上にもみえるとして、百歳の長寿を保つ
た江村專齋(一五六五—一六六四)の例を美成が例示してい
る箇所である。

【史料4】

a 『不如学齋叢書』③【126】「四季著」

入仕ノ奴僕ニ時ノ衣服ヲ給スルヲシキセト云フ、書言字
考ニ四季施ト見ユ、中山伝信録ニ春秋四季賜袍褂衫褲、
鑑真東征伝に、四季給時服

b 『世事百談』126「しきせ」

召つかひの者に時の衣服給するをしきせといへり。文字
には仕著、あるひは四季施など書けり。書言字考に見え
たり。古鈔の曾我物語に、四季をり／＼の小袖をたまひ
といふことあり。かゝれば四季施とかゝんこと義におき
てかなへるとおもひ居たりしに、他日琉球の中山伝信録

に、春秋四季賜袍褂衫褌といふことのあるを見出たりしが、猶ふるく鑑真東征伝に、四季給時服ともあり。おもふに四季施と書る施の字おだやかならず。四季著の約語なるべし。

aでは、原文における美成の思考過程は省略され、結論のみで簡潔に要約されて書かれている。項目名も原題が「しきせ」と漢字での表記を保留しているのに対し、aでは、「四季著」として、表題も結論を先取りしたものとなっている。

以上のような省略・要約は、『不如学齋叢書』三冊のいずれにも見えるものである。

元長は随筆の記述を鵜呑みにして、単にその結論を要約しているばかりではない。

『不如学齋叢書』③【6】「妓王、岐女父之名」の原文は、栗原信充の『柳庵雜筆』1-3「妓王、岐女の父の名」にある。

そこでは、嵯峨の往生院で院主の尼が信充に見せてくれた「山城国葛野郡、嵯峨往生院の旧記」に「妓王は惠那九郎時長の女也、妓王法尼往生、建久元年七月十五日と云ふ」という記述があったという話から始まる。それを知った信充は、「盛衰記によれば、妓王、妓女の遁世は治承四年にて、妓王廿一、

妓女十九、閉四十七、仏十七」だが、「旧記」の建久元年に従うなら「妓王卅一歳なり。妓女廿九、閉五十七、仏廿七になるべし」と書いている。

ところが、元長の抄録では、「惠那九郎時長の女也、両女の遁世八治承四年にて、妓王廿一、妓女十九、閉四十七、仏十七」としか記されぬ。元長が正しいと判断したのは、『源平盛衰記』の記述のほうであり、父の名が「惠那九郎時長」であったこと以外、「嵯峨往生院の旧記」の記述には全く触れていないのである。

ここから、元長の抄録は、必ずしも随筆の作者の結論や意図に沿った形では行われなかったことがわかる。元長の抄録には、情報の取捨選択がみられるのである。⁸⁰

『不如学齋叢書』③【135】「スリノギ坊主」と【136】「高坐六十那智八十」は、『世事百談』の目次の中に該当する項目がみえない。

ところが、『世事百談』の本文を読んでいくと、1-5「俚諺」の文中に「僧をいやしめてすりこ木坊主といふこと内典に似たることありとて……高坐六十那智八十といふことは、男色のことのやうに世にいへどきにあらず、これは紙一状の数なり」と、同様の文が見つかった。【135】と【136】は、列

記された「俚諺」の中からそれぞれ一節を抜き出して、元長が自ら項目名をつけたものだったのである。

このように、原文からさらに細かい項目を立てる形での抄録も、『不如学齋叢書』の中には見られる。

最後に、抄録の項目名についてであるが、これも原題通りでないものが多い。

『不如学齋叢書』【204】「放魂収魂」の出典は、『南畝考言』であり、原題は、「正月の気のぼし」。南畝は、「もろこし」の「少年游治の輩」においても正月には、今でいう「気のぼし」があり、これを「放魂」（本業に戻ることは「収魂」というと書いている。それを讀んだ元長は、もとの漢語のほうに検索の便を感じたらしく、「放魂」と「収魂」を項目名に冠している。

以上のように、『不如学齋叢書』における抄録には、原文を忠実に筆写するだけでなく、文章の①省略や②要約、あるいは③情報の取捨選択や④新たな項目立てがみられた。さらに、あとから引き直すときに採しやすいよう、⑤項目名も自らの言葉で工夫してつけられたのである。

三 随筆の知識・情報の活用

1 紀行の記述への利用―幕末期

嘉永五年（一八五二）、元長は伊勢参りを兼ねて、奈良、大坂、京都への西国旅行に出かけている。その際に書かれた紀行が『遊勢紀勝』（小室263）である。同書の中には、以下のような記述が見られる。

【史料5】『遊勢紀勝』（小室263）正月九日条

同「原」駅の右評鳴ヶ原に大沼あり、左に足高山聳ふ、此間に不二の山を左に望む処あり、油井駅を經、今泉村に右大将家卷狩の御本陣并人足小屋の遺趾あり、此夜吉原駅扇屋伊平に宿す

ある随筆に駿河のふし山八三国に跨り、吾邦無雙の高山也、塵塚物語に直に立れば九十六町ありと云、月刈藻集に直立二十五町と云り、何れか正きを知らず、享保十二年藤福山某といふ人測量せしに吉原駅よりふしの頂まで式百十六町式分十六（二十間四方の盤にてこれを測る、差壹寸八分五厘）里数にすれ

八六里零々六零之六となれり、山の高さ八三拾五町六分式一六三〔兩柱の間壺丈壱尺にて高差壺尺九寸七分三厘〕とあり

其蝸翁草に云、並河五一郎五畿内志を撰はんとて上京のをり、ふし登山の志ありて麓の家ヲ宿し、人穴を見んことをはかる、(中略)

総てかやうのことにはいろ／＼のはなし多きものなれハこゝにしるし置ぬ

前半は、一見したところ「ある随筆」「塵塚物語」「月刈藻集」の三書から引用しているように見える。しかし、この「ある随筆」とは、山崎美成の『世事百談』であり、以下の文章は、同書 328「富士山の高さ」からの孫引きである。続く後半は、神沢杜口『翁草』39-24「富士山人穴の事 並河五一郎人穴に入る」からの引用となっている。前者は、『不如学齋叢書』③【155】「不二山高」、後者は、同【86】「富士人穴」に収録された抄録と一致することから、これらは『不如学齋叢書』から再引用されたものであると考えられる。

元長は、『遊勢紀勝』中の和歌の浦についての記述の中

で「男波女波の説は、貝原氏の南遊紀行に譲」として、貝原益軒の『南遊紀行』から男波女波に関する記事を引用している。近世において、益軒の紀行はよく読まれ、紀行の記述に利用されることが多かったが、元長の紀行において随筆からの抄録は、益軒の紀行と共に情報量を豊富にするものとして利用されていたのである。

以上から、幕末期において元長が、『不如学齋叢書』に抄録した随筆の情報を、紀行を記述する際に利用していたことがわかった。ここでは抄録した文章をそのまま紀行中に引用するだけであり、その知識を用いた考証は行っていないことにも留意しておきたい。

2 情報源としての随筆——明治十年代

抄録された随筆の知識は、明治十年代に入ってからどのように使われたのであろうか。ここでは、新聞記事および書簡からその利用の様子をうかがいたい。

はじめに、明治十三年（一八八〇）五月三日から十日まで『報知新聞』に連載された随筆「五月雨草紙」を取り上げる。

【史料6】『報知新聞』五月三日 二千百七十三号

家兄喜多村香城先生老て戊辰の変に逢ひ、戸を鎖て出す、徒然の余り既往の事の懐に上るを筆記し、之を五月雨草紙と名け敢て人にも示さずありしか、物故の前に其門人野州の平石謙三に遺したるを聞きたれハ、此程取寄せて見しに、固より一時偶然の筆に成りたる者なれハ倫叙次第も無く書綴りあれと、中に八大に往時の様を見るに足る者あれハ茲に小言の欄を借りて好事の人の覽に供せんと欲せり、読者其燕陋を嘲るなけれハ幸なり

「五月雨草紙」は、戊辰戦争の最中⁽⁴³⁾、自ら塾居していた幕医喜多村直寛⁽⁴⁴⁾（二八〇四―一八七六）が、胸中に浮かんだ過去の出来事・文物（年代としては享保から慶応期にわたる）を記した随筆である。同書は、人目にさらされることなく門人の手元に渡っていたが、弟の栗本鋤雲⁽⁴⁵⁾（二八二一―一八九八）によって『報知新聞』に全録掲載された。【史料6】は、その前文であるが、鋤雲が読者として「好事の人」を想定していることにも注目して

おきたい⁽⁴⁶⁾

掲載された「五月雨草紙」には、鋤雲によつて加筆がなされているが、そこに元長が登場する。

【史料7】

a 『報知新聞』五月十九日 二千二百十三号

鋤雲云、本月四日二千百七十四号小言欄内五月雨草紙の末に附記したる青木昆陽か甘諸先生の墓の事ハ伝ふる所に異あり、迺此程埼玉県武州比企郡番匠村の小室元長翁か許より贈られたる太田南畝一話一言の抄文あり、左に録出す

安永七年秋九月廿五日、亞相（孝恭公子）遊獵目黒、其時余警衛滝泉寺、々後之山有る碑、刻甘諸先生墓五字、右側享保二十年、青木敦書蒙命種甘諸、因人呼甘諸先生、甘諸流伝、使天下無餓、是余願也、今作寿塚、旧石曰甘諸先生墓、左側君諱敦書、字厚甫、源姓青木氏、号昆陽、元禄十一年戊寅五月十二日生、明和六年己丑十月十二日終、寿七十二、葬于目黒村別野南、君為儒、营葬地于此故也、

余ハ此正説を為るを以て尤も謀を世に伝ふるの罪を免かるゝを悦ひ思ふ也

b 『報知新聞』五月四日 二千百七十四号

又昆陽の墓八目黒行人坂より不動に至る道の左方山中に在り、昆陽の墓と誌しあるか、月日ハ詳ならずれとも例年都下甘諸問屋の者より物を供へ幟など建て今に怠らず（後略）

元長は、五月四日の「五月雨草紙」に付記された「甘諸先生の墓の事」に「異」があるとして、鋤雲へ大田南畝の随筆『一話一言』から書き抜いた抄文を送りつけた⁽⁴⁷⁾。それを受け取った鋤雲は、誤った情報を世に流す罪を免れたとして悦び、「正説」として紙面に載せたのである。a、bの比較から、元長の指摘は、主に墓石に刻まれた文字の「異」についてであつたと考えられる。

さらに鋤雲は、「五月雨草紙」中の塙保己一についての話（五月三十一日二千百九十七号掲載）の続きとして、二千二百十三号に「小室元長氏贈る所の塙檢校小伝一書」を転記している。鋤雲は「小伝」について「失記書名」

と書いているが、その出典は、山崎美成の『三養雜記』に「塙檢校小伝」である。当該記事は、『不如学齋叢書』①【38】に抄録されており、元長はそこから再筆写した抄文を鋤雲に贈ったのではないかと考えられる。

このように元長は、随筆の抄文を記者に送りつけることで、新聞の記事に異見を出していた。

元長が書状を送っていたのは、報知社の鋤雲に限らない。『不如学齋叢書』③【94】には、朱色の交詢社書簡箋が貼り付けられている。

【史料8】『不如学齋叢書』③【93】「回答の写し」

服狭山フクサヤマと訓しならん、年号の下に干を横に書くハ未見、重忠の発句笑止のものなり、決して鎌倉頃の風にあらず、又同人哥又は連歌などせしことを未だ見当らす

（朱筆）「石八明治十四年十二月交詢社へ將門記中比企郡服狭、及ヒ年号ノ下支干ヲ横ニ書スル事、重忠夏山云々ノ事ヲ質問セシ所、鈴木真平翁ノ説トテ幹事小幡次郎氏ヨリ回答セラレシ所也」

文末に記された元長による朱書から、これが明治十四年（一八八二）二月に、元長が交詢社へ送った三つの質問に対する回答であることがわかる。交詢社は、明治十三（一八八〇）に慶応義塾関係者によって設立された社交クラブであり、知識の交換と世務の諮詢とを会の目的として、『交詢雑誌』を発刊していた。小室家文書には、「交詢社社則」（小室458-2）が残り、『交詢雑誌』からの抄録が『工村々舎叢書』等の編纂物に散見されることから、元長は、同紙を購読していたものと考えられる。

「交詢社書簡箋」が貼り付けられた丁には、人情本作家・為永春水の名で有名な佐々木貞高の随筆『閑窓瑣談』310「古人秀句」からの抄録が収録されている。

【史料9】『不如学齋叢書』③【46】「諸将発句」

○諸将発句（朱筆）「閑窓瑣談第二十条古人秀句ノ中、正徳二千辰年印本温故集〔蓮谷撰〕二出ツト載タリ」

曾我兄弟のものか親の敵をねらふを哀れと思ひ出して

夏山や思ひしげミのこかるゝハ 重忠
小田原や思ひのまゝに刈おふせ 秀吉

（後略。他に細川玄旨法印、林羅山、深水元政上人、里村法橋紹巴の句を筆写。）

ここで元長が『閑窓瑣談』の記述をもとにして、正徳二年（一七二二）の印本『温故集』に載っていると朱書しているのは、（左に書かれた）畠山重忠の歌である。実は、元長が交詢社へ送った「質問」のひとつ、「重忠夏山云々ノ事」とは、ここに書かれた「夏山や思ひしげみのこがるゝは」の歌について『閑窓瑣談』の記述に立脚した質問だったのである。

交詢社への質問に先立って元長は、好古仲間にも重忠の歌について尋ねていた。例えば、明治十四年九月十六日付の根岸友山⁽⁴⁸⁾（一八〇九—一八九〇）宛書簡には、「閑窓瑣談」からの抄録をそのまま載せた上で、「何と正しき書而御見当の事御座候哉、同度候、温故集と申者も遂二見た事無御座候、如心齋家二而も一向分り不申候」と記している⁽⁴⁹⁾。

明治十年代前半の元長の周辺では、「発見」された畠山重忠の供養碑の修復事業⁽⁵⁰⁾をきっかけとして、重忠に対する関心が高まっていた。彼らの間では、畠山氏についての情報や史料が積極的に交換されていたのである⁽⁵¹⁾。その過程で、重

忠の歌について疑問が出てきたために、元長は、以前に抄録していた随筆の記述をもとに交詢社へ質問を送ったものと考えられる。

続いて、比企郡久米田村（現吉見町）の名主・戸長を務めた内山作信⁽⁶²⁾（二八一六―？）が元長に宛てた書簡を取り上げる。

【史料10】「内山手簡」（小室 140）【19】明治十四年十二月二十日付第五条

○「一説二当時ノ城主ハ幕府時代ノ大名ノ如キ者ニ無之云々」、此説にては可然歟と奉存候、或随筆に浮田秀家八丈島に流され、年老て後大陸の者に出逢ひ、備前岡山の形状を聞かれしに、諸士皆城下に居住し繁華なる由答えたれば、然らハ日本は泰平なるを知らるゝといはるゝにより、如何して泰平を知り給ふと、問に、乱れたる世は家士を四方に分ち置、不時の変に備るものなり、諸士城下にのミ在は、泰平なればなりと答へられしと（其書目体裁も皆失忘す、啻大意を記憶するのみ）

十二月廿日

内山作信

小室工村先生閣下

冒頭の記述から、元長は小田原北条氏の時代の城主のあり方は、「幕府時代」の大名のようではなかったとの説があるがとの疑問を作信へ投げかけていたことがわかる。それに対して作信は、流謫の身であった宇喜多秀家が島を訪れた「大陸の者」と会話した内容を事例に回答しようとした。しかし、根拠とした「或随筆」の書名や体裁については忘れてしまったという。

書状を受け取った元長は、欄外に朱筆で、「按に柳庵雑筆に秀家の事を記せしと覚ゆ、此事此中に有んか」と記し、出典について推測している。

『柳庵雑筆』トの「浮田秀家書画」には、秀家が八丈島へ流されたときの記事がみえ、元長はこの記事を『不如学斎叢書』③【5】に抄録している。元長は『柳庵雑筆』を以前に筆写していたことで、該当記事が同書にあることを覚えていたものと考えられる。ただし、該当の箇所までは写していなかったために、作信が書いていた内容について確認することはできなかった⁽⁶³⁾。自らの関心のある部分のみを書抜していく抄録という方法は、このよう

な不具合をもたらすこともあったのである。欄外の朱筆には、「今腕近に該書なくしてあなぐりがたし」と続けて書かれ、元長が随筆を蔵書として常に手元に置いていたわけではないことが確認できる⁸⁶⁾。

3 加筆と挿入——晩年まで

『不如学齋叢書』と『叢書』には、抄録後の加筆も諸処にみられる。

『不如学齋叢書』①【13】「忌日 遠忌」では、最後の一文「年忌ノ事、釈明遍瑞溪〔相国寺僧〕云一切経中曾テナシト云リ」で出てきた相国寺の僧について、欄外に「高野山僧正櫻町中納言成範卿弟、平宗盛時人」、「按康富日記瑞溪作端溪」と、情報の補足と校正を行っているのが確認できる。このような加筆に加えて両叢書には、しばしば朱点や墨点が施され、抄録後も熱心に読み返していたことがうかがえる。

また、『不如学齋叢書』①【19】「三折肱」は、出典が確定出来ないものの、三回も肘を折るほどの努力を重ねてようやくよい医者になれるとの「医家」の故事がある

が、それは誤りであるとの内容の記事である。その末尾には「笠山按此説左伝注ニモ見エタリ」と書かれ、同様の説の参照先が記されている。これらは年代は書かれていないものの、筆跡から抄録からそれ程経たないうちに書き加えられたものと考えられる。

さらに、明治十年代に入ってから記事の加筆がみられる。

【史料1-1】

『不如学齋叢書』①【5】「藕糸」

蓮ノ絲ニテ機ヲ織事ハマコトニ難キワザナレドモ当麻寺ノ曼荼羅ノタヤスクナリタルハ化女ノシワザ故ナリ
又**法隆寺靈宝目錄**ニ、藕絲ノ袈裟、中将姫織 **寺社宝物展覧録**ニ、当麻寺ノ什物、中将姫所レ製藕絲袈裟一被ヲト見ヘタルハ化女ノ法ヲ伝ヘるひしニヤ其外毛同寺ノ什物ニ微笑尼、新製藕絲袈裟一被、又東大寺什物鑑真和尚、将来藕絲袈裟一被、**発心集**云邈俊ト云僧アリケリイカデ伝ヘ持タリケン昔文殊ノミノリトキゐひケル時ノ御袈裟トテ蓮ノ絲ニテ織ル袈裟ナリ（中略）
又大湖備考ニ呉莊ガ葉金山詩ノ自注ニ（中略）コレ芋

ニモ亦藕絲ノ名ハ有ナリ〔此事近人ノ隨筆ニモ出タレバ捨ヘケレトモ旧稿ニ載タレハステカネツ所謂鶏肋ナリ〕

(十七丁分略)

○藕絲觀音說 明治十二年十月廿九日東京日々新聞二千三百六十八号掲載

此程大隈參議ノ御母堂三井子ヨリ藕絲ヲ以テ織リタル児育觀音ノ像長壹尺壹寸幅六寸余ヲ福田會育兒院ヘ寄附セラレタリ其厨子ニ池原日南氏ノ撰文并和歌二首アリ左ノ如シ

(撰文略)

明治十一年戊寅十月

池原大所 識

いにしへもかゝるためしハありといへと残やはちすのいともめつらし
くりたおるはちすのいとの一筋にこゝろこめすはいかてかなしけむ

十二年十一月八日

工村壱史追録

ここで引用されているのは、北静廬の隨筆『梅園日記』の「藕糸」からの抄録である。元長は、その一七丁先の余白部分に、明治十二年（一八七九）一〇月二十九日の『東京日々新聞』二千三百六十八号に掲載された「藕絲觀音說」を加筆している。大隈重信の母親が蓮の糸で織った育兒觀音の像を「福田會育兒院」へ寄贈したという記事であり、それをおさめる厨子に書かれた撰文と歌を載せている。

また、『叢書』①〔5〕「盲曆盲心経」は、『東遊記』後篇139「蛮語」から南部地方の繪曆の図を模写しているが、その最後の丁に「余近読枕山詩抄三編省此詩因附記于此 明治十八年四月十九日 笠山人 識」として、幕末・明治の漢詩人・大沼枕山（一八一八—一八九二）が南部の繪曆について詠んだ漢詩を書き足している。

元長は、明治十八年（一八八五）十二月十日に亡くなる。両叢書には、最晩年に至るまで、加筆が行われていたのである。

おわりに

本稿では、元長の編纂物のうち、これまで分析の俎上に上

げられることになかった『不如学齋叢書』と『叢書』の基礎的分析を行い、その上で、抄録された随筆の知識・情報の活用の方の一端を明らかにしてきた。

一見様々な書物を渉猟して著述しているかに見えた『不如学齋叢書』と『叢書』は、実際には、随筆からの抄録集や写本によって構成される編纂物であった。随筆を読み、抄録することによって、元長は、多くの原典にあたらずして、関心のある事柄に関する知識や、必要とする情報を効率よく収集することができたと考えられるのである⁽⁵⁵⁾。

『不如学齋叢書』に収録された抄録は、幕末期には、紀行の記述情報を充実させるために、そのまま紀行に引き写す形で利用されていた。維新を挟み、明治十年代に入ってから、随筆からの抄文を利用して、新聞社へ異見を送ることも行っていた⁽⁵⁶⁾。さらに、抄録した随筆の知識に基づいた質問を交詢社や好古仲間等に送っていた。

合山林太郎氏は、青少年期における森鷗外の読書を分析し、鷗外が漢詩文と共に近世後期に著された漢文の考証随筆を熱心に読んでいたことを明らかにしている。鷗外は、明治十年代には、新聞社への投書へ随筆の記述を引用することも行っており、「こうした漢文考証随筆への

興味は、同時期の市井の識者や戯作者、和学者らの考証随筆への関心と一体のものであった⁽⁵⁷⁾。」と、合山氏は位置づけている。明治十年代には、考証随筆に対する関心の高まりがあり、元長のように随筆の知識・情報を活用していた人々は決して少なくなかったと考えられるのである⁽⁵⁸⁾。

『不如学齋叢書』と『叢書』に抄録された随筆は、典籍がよく残されている小室家文書の中にあつて、いずれも現存しない⁽⁵⁹⁾。元長と作信との間でやりとりされた書簡の記述からも、随筆の原本が手元にないことがしばしばあつたことがうかがえた。

本稿での分析を踏まえると、著述者によって集められた雑多な情報集である随筆から、読者は必要な情報や関心をもつた「事実」を抜き出し、自分だけの抄録集をつくって手許に置いておくという読書形態が、随筆のひとつの読み方としてあつたと考えられるのではないだろうか。今後、他の事例についても検証していく必要がある。

ここで、「はじめに」でみた揖斐高氏の随筆理解に立ち返るならば、今回分析した『不如学齋叢書』と『叢書』のような編纂物も随筆に含まれることになる。森銑三氏

は、「筆者自身は備忘のための抄録に過ぎなかつたのが、後に随筆として扱はれるやうに」なつたものとして、「随筆雑抄」の称を挙げている。⁽⁶⁰⁾ もともとは「備忘」などとも称していた抄録集を再編集して改装を加え、晩年まで加筆が続けられていった両叢書は、この「随筆雑抄」にあてはまるだろう。

朝倉治彦氏は、「これまで無視されてきた抄出随筆、自分の意見はなく、先人の著作の抄出のみというのが多く残っているが、これは編者の意向のみにとどまらず、時代の好尚まで知る手がかりを与えるものであることに、留意すべきである」と記している。⁽⁶¹⁾ このような指摘があるにも関わらず、「はじめに」でみたように先行研究で取り上げられる対象は、考証随筆に偏重している。

一方で、近年、読者論の進展と共に読書記録についての分析が進められてきている。⁽⁶²⁾ 読書記録の典拠を丹念に明らかにしていく作業により、近世における読書や学習の実態が解明されつつあり、軍書や稗史、仮名草子、教訓書等の書物による、儒学書に基づいた本格的な学問受容とは異質な、学問・思想形成のあり方が指摘されてきているのである。

そのような読書記録として、森氏のいうところの「随

筆雑抄」、朝倉氏のいう「抄出随筆」を分析することで、随筆の受容のあり方、随筆を抄録することの意味を明らかにしていくことができるのではないか。

本稿では、『不如学齋叢書』と『叢書』の基礎的分析に終始したが、読書記録として両叢書を見るならば、抄録された項目の傾向やその内容から、元長の関心や意識に迫ることができるはずである。小室家文書内の他の編纂物にも随筆からの抄録が確認できる。⁽⁶³⁾ 今後、それらと小室家の蔵書、書物の購入記録等を併せて分析していくことにより、随筆の受容をより立体的に解明していくことが可能であると考ええる。

一方で元長は、軍書や地誌等の抄録・筆写も熱心に行っていることから、それら書抜の実態や意味についても併せて明らかにしていく必要がある。元長等による『新編武蔵風土記稿』の筆写については、重田正夫氏が明らかにしている⁽⁶⁴⁾が、元長は他にも様々な軍書・地誌を筆写しており、それらが随筆からの知識と共に、どのように『小田原北条分限帳』の校正や地域の歴史考証へとつながっていたのか明らかにされなければならない。

以上は、今後の課題である。

【註】

- (1) 鳥居龍藏『鳥居龍藏全集』第二二卷（朝日新聞社、一九七七）、一三三頁。
- (2) 鳥居龍藏『鳥居龍藏全集』第二二卷（朝日新聞社、一九七七）、四二八頁。
- (3) 坪井自身も「私ハ幼少ノ頃カラ雜書ヲ読ムノガ好キデシタガ、博物書ヤ隨筆ノ類ヲ見ルニ及ンデ事物ヲ比較シテ異同變遷ヲ考ヘルノ方面白クナリマシタ」とし、ともに人類学会を立ち上げた白井光太郎（一八六三—一九三三、植物学者）らと親しくなったのも彼らが同好の人間だったからだと同想している（坪井正五郎「本會略史」『人類學會報告』一、一八八六）。『新和漢三才図会』は、明治になってから再刊された『和漢三才図会』かと考えられるが、未詳である。
- (4) 朝倉照平『南方熊楠の説話学』（勉誠出版、二〇一三）。
- (5) 小峯和明『説話学の階梯—近世隨筆から南方熊楠へ』（『国文学解釈と教材の研究』四六（二〇）、二〇〇二）。
- (6) 明治初期における稗史の受容については、歴史書から漢文教材へと性格を変化させてゆく『日本外史』等を含めて考察していく必要があるが、今後の課題としたい。
- (7) 朝倉治彦編『日本隨筆辞典』（東京書籍、一九八六）。
- (8) 揖斐高『江戸の文人サロン—知識人と芸術家たち—』（吉川弘文館、二〇〇七）、一二九—一三〇頁。
- (9) 古い文献や物品などを考え調べ、証拠を引いて、物事の説明をすること（『日本国語大辞典 第二版』小学館、二〇〇〇）。
- (10) 「考証家」が史料用語ではない点には留意。近年は、幕府の和学講談所や明治政府の諸官庁、大学等の機関における考証能力の活用に関心が向けられ、国学（和学）系の考証家に注目が集まっている。代表的な研究として、大沼宜規「考証家の一側面—「後松日記」をてがかりとして」（『史境』三八・三九、一九九九）、同「明治前期における歴史考証とその淵源—「経済有用」の系譜—」（『季刊日本思想史』六七、ぺりかん社、二〇〇五）、同「前田夏蔭の「公務ニ有益之学」—幕末期における考証派国学者の動向—」（『日本歴史』八〇四、二〇一五）、藤田大誠『近代国学の研究』（弘文堂、二〇〇七）、同『近代国学と郷土史』（由谷裕哉・時枝務編著『郷土史と近代日本』角川学芸出版、二〇一〇）等が挙げられる。
- (11) 例えば、岩本活東子（一八四一—一九一六）が文久年間に既存の隨筆を叢書として編纂した『燕石十種』は、一九〇七年から国書刊行会によって活字化・刊行された。その後、明治四十二年（一九〇九）に『続燕石十種』、明治四十五年（一九一二）から大正二年（一九一三）に

かけて『新燕石十種』を新たに編んでいる。また、昭和二年から四年（一九二七—一九二九）にかけて刊行された『日本随筆大成』四一巻は、戦後に新版、新装版が出、三度にわたって復刊されている。

(12) 井上泰至『サムライの書齋—江戸武家文人列伝—』（ぺりかん社、二〇〇七）。

(13) 佐藤悟「文化元年の出版統制と考証随筆—『絵本太閤記』絶板の影響—」（『文学』八（三）、二〇〇七）。

(14) 高木元『江戸読本の研究—十九世紀小説様式攷—』（ぺりかん社、一九九五）、井上泰至『近世刊行軍書論 教訓・娯楽・考証』（笠間書院、二〇一四）。

(15) 佐藤悟「考証随筆の意味するもの—柳亭種彦と曲亭馬琴—」（『国語と国文学』七〇（一一）、一九九三）、井上啓治『京伝考証学と読本の研究』（新典社、一九九七）、岡村敬二『江戸の蔵書家たち』（講談社、一九九六）、表智之「『歴史』の読出し／『歴史』の受肉化—（考証家）の19世紀—」（江戸の思想編集会編『江戸の思想7 思想史の一九世紀』ぺりかん社、一九九七）、同「19世紀日本における『歴史』の発見—屋代弘賢と『考証家』たち—」（『待兼山論叢（日本学）』三一、一九九七）等。

(16) 佐藤深雪「山東京伝—転換期の考証家（古典学者の群像—古代から近世まで）—」（『国文学解釈と鑑賞』五七

（三）、一九九二）、井上啓治『京伝考証学と読本の研究』（新典社、一九九七）、山本和明「山東京伝と『考証』—戯作者一側面—」（『中西智海先生還暦記念論文集 仏教と人間』永田文昌堂、一九九四）、同「貫流する『考証』—例えば京伝—」（『日本文学』四五（二〇）、一九九六）、同「京伝と和学—戯作者一側面—」（『江戸文学』一九、一九九八）等。

(17) 鈴木廣之『好古家たちの19世紀』（吉川弘文館、二〇〇三）、同「明治期における物の価値と蜷川式胤」（『明治聖徳記念学会紀要』四一、二〇〇五）。

(18) 『朝野新聞』明治十三年十月二十九日二千百三十七号雑報欄。
(19) 表智之「書評 明治初頭期における古物趣味の持続と転回—鈴木廣之『好古家たちの19世紀』によせて—」（『美術研究』三八六、二〇〇五）。

(20) 近世を通じて石高二三六石余、畑方約二五町、田方約五町の畑勝の村であった。戸数は六八戸で、天保十一年（一八四〇）には、男一四五人、女二二一人。

(21) 周辺村落から門弟を集め、日本で最初に帝王切開を行なった伊古田純道（一八〇二—一八八六）や岡部均平（一八一五—一八九五）ら多くの医師を輩出した。

(22) 三代元長は、「元貞八自負して愚老の事を等閑二す、堯民二口伝を残すへし」と、「後孫」への知識・技術の伝

承を兼ねて二六冊もの日記を残している。芳賀明子氏は、三代元長の日記の記述をテーマごとに抄出、内容を紹介している（芳賀明子「武州比企郡番匠村の老医師小室元長の日記く文政九年から嘉永四年まで」『文書館紀要』二八、二〇一五）。

(23) 入間郡阿諏訪村（現毛呂山町）生まれ。通称俊介、実名忠恕、号称称、鶯谷。三代元長に入門。天保元年（一八三〇）より鳥羽藩医（文化財保護審議委員会編『安藤文沢―種痘の創始者郷土が生んだ蘭方医―』毛呂山町史料集第二集、毛呂山町教育委員会、一九九二）。

(24) 名は俊逸、字公晦、通称善治、後に万助、号は他に囚山亭、晚晴楼、舍魚堂等。忍藩藩儒。常陸国潮来生れ。波山の号は、筑波山の名に基づく。文政九年（一八二六）に忍藩校進修館へ招かれた。忍で漢学塾を開き、多くの子弟を育てた。漢詩集『囚山亭百律』、『学務知要』を著す（市川任三「芳川波山年譜稿」（『立正大学北埼玉地域研究センター年報』七、一九八四）、村山吉廣『忍藩儒芳川波山の生涯と詩業』（明徳出版社、二〇〇九）。

(25) 田口寛『鎌倉大草紙』一刊行本文の性質について―『史籍集覧』所収本の形成情況（『日本文学研究』四四、二〇〇五）。『新編埼玉県史 資料編八 中世四』（埼玉県、一九八六）に所収。

(26) 以上の説明は、主に『小室家文書目録』（埼玉県立文書館、一九九七）、細野健太郎「近世後期の地域医療と蘭学―在村医小室家の医業を中心に―」（『埼玉地方史』四三、二〇〇〇）を参考にした。

(27) 「芳川波山名字讓状」（小室5755）。行田市史編さん委員会編『行田市史 資料編 近世 二』（行田市、二〇一三）、六〇〇頁に翻刻。

(28) 金谷治訳注『論語』（岩波書店、二〇〇六）、三一八頁。

(29) 細野健太郎「在村医の家業と経営」（『立正大学大学院年報（文学研究科）』一九、二〇〇二）。

(30) 細野健太郎「医療の「近代化」と在村医」（『文書館紀要』一七、二〇〇四）、同「幕末明治初期の埼玉県域における種痘の様相」（『国立歴史民俗博物館研究報告』一一六、二〇〇四）。

(31) 重田正夫「幕末・明治初期「好古家」たちのネットワーク」（『埼玉の文化財』五一、二〇一一）、同「明治初期における武蔵の「好古家」根岸友山と武香（上）（下）」（『熊谷市史研究』六・七、二〇一四・二〇一五）、芳賀明子「好古家」の書簡集『内山手簡』―内山作信と小室元長との交流（『文書館紀要』二五、二〇一一）。

(32) 工藤氏は、「一次利用が終わって蓄積された文書類を、明確な意識のもとで二次利用を目的として作成（書写、

編纂)されたものを、完成度や内容などの差異に拘わらずに「村の編纂物」と定義している(工藤航平「近世地域社会における蔵書とはなにか―地域(知)の史料論的研究を指して―」『国文学研究資料館紀要アーカイブズ研究篇』七、二〇一)。

(33) 武井尚「小室家の中世文書―屋代典憲氏所蔵古文書之写―について―」(『埼玉県立文書館文書館紀要』四、一九九〇)、新井浩文「小室家文書所収の中世文書―『工村々舎叢書』所収「内山氏古文書写」について」(『文書館紀要』一一、一九九八)。

(34) 芳賀前掲論文二〇一二。

(35) 主に①「日本随筆全集索引」(國民圖書株式會社編輯『日本隨筆全集』二〇卷、國民圖書、一九三〇)、②太田為三郎編『日本隨筆索引』『続日本隨筆索引』(岩波書店、一九六三。初版は、正編が一九二六、続編が一九三二)、③柴田宵曲他編『隨筆辞典 新装版』(東京堂出版、一九七九。初版は一九六一)、④『海録―江戸考証百科』(ゆまに書房、一九九九。『海録』(国書刊行会、一九一五)の復刻版に索引を付している)を用いた。このように隨筆の索引が戦前から作られ、戦後もそれが再版されていることから、レファレンスとして隨筆がいかに使われてきたかを確認することができる。

(36) 『誠廬茶話』は五編以上、『不如学斎襟筆』は二編以上から成っていたと推察される。

(37) 「奈倉」とは、彫刻家として有名な秩父の奈倉玄黄斎(一八〇七―一八八六)を指すと考えられる。白久村(現秩父市)の山中家に生まれ、庄吉と名のり、幼いころから彫刻に巧みであった。成人後、名を金道、権衛と改め、雅号を竹貫、竹雅と称して彫刻や詩文の制作にあたった。

(38) 細野健太郎「近世後期の地域医療と蘭学―在村医小室家の医業を中心に―」(『埼玉地方史』四三、二〇〇〇)。

(39) 元長は、明治八年(一八七五)の熱海旅行の際に白石の墓を訪れており、明治十四年(一八八一)には、浅草で骨董商を営んでいた旧幕臣の国学者畠山如心齋(?!―一八八三)にたのんで浅草東本願寺内にある白石家代々の墓を探索させている。また、如心齋を通じて白石社から出版された活字本を多く予約購入しており、白石に対するひとかたならぬ関心の高さがうかがえる。

(40) 引用文中のカギ括弧は、引用文の末尾を示すために元長が書き加えたものと考えられる。

(41) 『柳庵雑筆』からの抄録では、挿絵の模写も多い。前述の『柳庵雑筆』T-13「妓玉、岐女の父の名」に載る「嵯峨往生院安置四比丘尼像」は筆写されないのに対し、4「浮田秀家書画」、4-28「駅路鈴」、3-9「玄関」等の図

は丁寧に模写されている。いずれにせよ、挿絵についても、『不如学齋叢書』では取捨選択が行われているのである。

(42) 板坂耀子『江戸の紀行文―泰平の世の旅人たち―』（中央公論新社、二〇一一）。

(43) 「五月雨草紙」最終回の『報知新聞』十月一日二千三百号の末尾には、「慶応四年戊辰七月小石川大塚と云ふ所の庵中にするす」とある。

(44) 代々幕府に仕えた医家・喜多村家の第八代にあたる。寄合医師喜多村槐園の長男で、母は三木正啓の娘で長谷川宣以の姪。天保二年（一八三一年）父の隠居を受け、家を継ぐ。初めは安積良斎について学んでいる。嘉永二年（一八四九）一二月一六日、法眼に叙せられる。多紀元年（一八五八）七月二五日、子・安貞に家を譲り隠居している。

(45) 名は鯉、初名は哲三、瑞見。通称は瀬兵衛。幕医喜多村家に生まれ、安積良斎の私塾を経て、昌平坂学問所で学ぶ。栗本氏の家督を継ぎ奥詰医師となるが、職を解かれ函館に移住。その後、軍艦奉行。慶応三年（一八六七）外国奉行として渡仏する。幕府倒壊後帰国、政府に仕えず隠退、明治五年「横浜朝日新聞」入社。明治六年「郵

便報知新聞」主筆。名記者と呼ばれ活躍した。

(46) 同号収録分の「五月雨草紙」末尾には、「今より生るゝ童子はさる世ありしとも知らて有る可けれハ聊か故紙にものして遣しぬ、抑も天運ハ循環して還らざる無けれハ再び堯天舜日に廻り逢ふ事も有可きなれと老たる身の頼むに足らされハ、今を見て昔を思ふ種と為すのみ」と記されている。直寛は、「五月雨草紙」を後世の人に自らが生きていた「世上益々太平の極度に達した」時代を知つてもらう手がかりにしようと考えていたのである。同書の『報知新聞』への掲載は、兄の遺志を鋤雲なりにくみ取つたものであつたと考えられる。

(47) 小室家文書には、『一話一言』一巻の抄録集が現存する（小室2004）。茶色雲模様空押し表紙がつけられ、題簽に「一話一言 折衷全」と墨書されている。

(48) 大里郡青山村（現熊谷市）出身の豪農。幼名房吉、諱信輔、字は仁卿、通称半七、友山は号。尊攘家として有名（沼田哲「武蔵の豪農と尊攘思想―大里郡甲山根岸友山の場合―」『季刊日本思想史』一三、一九八〇）。

(49) 埼玉県立文書館所蔵林家文書「諸書簡」（林1556）。引用文中の「如心齋」とは、浅草の骨董商畠山如心齋のことである。

(50) 明治十一年（一八七八）六月起工。事業には、元長ら地

域の「好古家」だけでなく、東京の人物も深く関わった。

(重田正夫「幕末・明治初期「好古家」たちのネットワーク」『埼玉の文化財』五一、二〇一一)。元長らは、畠山如心齋を通して副碑の撰文を栗本鋤雲に依頼しており、両者の関係は、この事業がきっかけになったものと考えられる。

(51) 『工村々舎叢書』④(小室²⁹⁸⁶)や、畠山如心齋・内山作信からの書簡をまとめて綴った「畠山手簡」(小室²⁹⁸⁷)・「内山手簡」(小室¹⁴⁰)等にその様子をうかがうことができる。

(52) 作信は、如心齋と同様に明治十年前後から元長と知り合い、好古仲間となった人物だが、前出の栗原信充等とも交流があり、「皇国学」を信奉する国学者であった。芳賀前掲論文二〇一二参照。

(53) 記事に続けて筆写されているのは、八丈島に残る秀家ゆかりの書画や遺品の図であり、抄録時の元長の関心は、記事の内容よりも信充が描いた図に向かっていたと考えられる。

(54) 『不如学齋叢書』に抄録された随筆の原典は、いずれも小室家文書中には現存せず、その多くは貸本屋や知人から借用したものであったのではないかと推測される。

(55) 「はじめに」で取り上げた鳥居龍蔵の少年期の回想の続き

には、以下のような記述がある。

私の指導を受けた人に川田秀嶺ひでたかねという先生があった。先生も国学者であるとともに、京伝や種彦の漫筆類を多く所蔵せられ、よく先生から漫筆のことを話されて、大いに利益を得た。けれども、先生は私を戒めて、漫筆は読んで面白く、一見物識りにもなるが、これで得た知識は知れたものだ、むしろそれよりも正しく本を読むほうがよい。かくせば漫筆類は自然に出来る、といわれた。(『鳥居龍蔵全集』第二二巻、朝日新聞社、一九七七、九一頁)。

ここで川田は、随筆による知識受容を戒めているわけだが、一方で、面白く読めて、たくさん書物を読まなくても「物識り」になれる本という認識が、明治初期にはある程度共通の認識としてあったようである。

(56) 抄文を送られた鋤雲の側もそれを貴重な情報として新聞に掲載していたことから、当該期において随筆に書かれた内容を信用に足る「事実」とする認識があったのではないかと考えられる。

(57) 合山林太郎「青少年期の森鷗外と近世日本漢文学」(『幕末・明治期における日本漢詩文の研究』和泉書院、二〇一四)。合山氏は、引用文中の内容についてとくに典拠を示していないが、明治期における古本事情とそれを取り巻く「好古家」のネットワークを明らかにした山本和

明「稀書翫味の交遊圈(一)」(『相愛大学研究論集』二八、二〇一二)、同「鹿田松雲堂というサロン(稿)―稀書翫味の交遊圈(二)―」(『相愛大学研究論集』二九、二〇一三)あるいは、山口昌男『内田魯庵山脈―失われた日本人』発掘―上・下(岩波書店、二〇一〇。初版は、晶文社、二〇〇二)等に言及がある。

(58) なお、明治初年から十年代にかけても多くの随筆が作られており、栗本鋤雲が『報知新聞』に書いた記文などもまとめるならすぐれた随筆として見ることができると、森銑三氏は述べている(森銑三『随筆書叢説』『森銑三著作集』中央公論社、一九七二)。

(59) 小室家文書七三三六点中、典籍は、約四〇〇〇点と半分を占める。しかし、そのうち随筆に分類される書籍は、数十点に過ぎない。

(60) 森銑三『随筆書叢説』(『森銑三著作集』中央公論社、一九七二)。森氏は、雑抄と随筆とは截然区別すべきとの立場であるが、その抄出に多少でも附記などのある場合は、随筆として取り扱っても差し支えないとする。

(61) 朝倉治彦「随筆について」(『日本随筆辞典』東京書籍、一九八六)。

(62) 横田冬彦「『牢人百姓』依田長安の読書」(『一橋論叢』一三四(四)、二〇〇五)、若尾政希(『安藤昌益からみ

える日本近世』東京大学出版会、二〇〇四)、小関悠一郎『(明君)の近世―学問・知識と藩政改革―』(吉川弘文館、二〇一四)等。

(63) たとえば、『南木廻家随筆』は、新聞・雑誌からの抄録を中心とした編纂物だが、森島中良(一七五六?―一八一〇)の随筆『桂林漫録』等からの抄録が見られる。また、本稿で分析した『報知新聞』掲載の「五月雨草紙」も、実は『南木廻家随筆』に筆写されているのである。

(64) 重田正夫・白井哲哉編『新編武蔵風土記稿』を読む(さきたま出版会、二〇一五)。

【付記】

本稿は、二〇一五年一月に一橋大学大学院へ提出した修士論文の一部を加筆・修正し、再構成したものである。執筆にあたっては、一橋大学大学院の若尾政希先生・渡辺尚志先生・石居人也先生から多くの助言をいただいた。

また、「小室家文書」が所蔵されている埼玉県立文書館にも大変お世話になった。なかでも職員の方賀明子氏からは、有益なご教示をいただいた。

さらに、第九十六回「書物・出版と社会変容」研究会では、報告の機会を与えていただいた。当日は、多くの方から貴重なご意見・ご指摘を賜った。本稿を成すことができ

たのは、これらの方に拠るところが大きい。未筆ながら、
心より感謝の気持ちを申し上げたい。